

カバディ熱中 生徒前向きに

飯能市にある自由の森学園中学・高校は、テストの学力と競争に縛られた子どもを学びを本来の学びに転換すべく、1985年に開校しました。自然の中で深く学ぶための独自のカリキュラムや、生徒がつくる学校行事などを特徴としています。

おそらく他の中学・高校にはないような変わったクラブもあります。それが、カバディ部。

カバディはインド伝統の競技で、鬼ごっこと格闘技を組み合わせたようなスポーツです。1チーム7人で、「カバディ、カバディ」と連呼するのも特徴の一つです。

部を昨年立ち上げた高3の小板橋良佑



君は、自由の森学園高校に入学して1年間は特に部活をしていませんでしたが、高2の春の体育祭で実行委員を経験し、それがすごく楽しくて、「高1の時を無駄にしたな」と感じたそうです。

何か自分からやってみようと思ってひらめいたのが、中学の時に深夜番組で見たカバディ。同年代の友達を誘ってメンバーを集め、自分のクラスで国語の授業を担当していた先生に顧問を頼み込みました。

部は大学チームと交流試合をしたりして力を付け、今年2月の全国学生大会では3位に。現在も週2回の練習を続け、新しい部員の獲得のため頑張っています。

自由の森学園高校校長

鬼沢真之

1960年生まれ。86年から自由の森学園中学・高校に勤務。担当は社会科。2005年から現職。

小板橋君は、カバディ部の面白さをこう感じています。「多分、高校では唯一だっていること。それにサッカーや野球と違って、みんなゼロからの出発だから、努力してどんどん向上するところかな」

彼は入学前、都内の私立中に通っていましたが。引込み思案で人目を気にする方だったそうです。自分の考えを否定されるのが怖くて、自分からはしゃべらず、授業で先生に当てられても、「前の人と同じです」と答えることが多かったといいます。学校は「成績社会」で、それが普通だと考えていたようです。

しかし、そのような学校生活に違和感があった、高校は自由の森学園に進学することにしました。「ここなら変わるかも」という予感があったそうです。

自分を取り戻し、他者とのつながりを紡ぎつつ、単立っていく。そんな高校生の姿を、このコラムで紹介していきたいと思えます。

◆
様々な教育現場に携わる専門家らによるコラム「まなぶ」を始めます。掲載は原則として火曜日の第2埼玉版です。